

特集／教育・学校に求めるもの

〈特集の趣旨〉

子どもたちのあふれるエネルギー、未完成ゆえの可能性は、限らない元気を私たちに与えてくれます。子どもたちが、特に学校でどのように遇されていくかはこれからの日本を左右すると言つてもよいでしょう。

しかし今、子どもたちがあちこちで悲鳴をあげています。いじめ、不登校、虐待などさまざまな心の症状。アトピー、アレルギーはじめ多様な健康問題。さらに元氣そうに見える子どもたちでさえ人間不信、自信喪失、生きづらさなどを抱えて苦しんでいます。しかもそうした傾向が広がり、悪化しつつあるようです。

こうした現状は、多くの人たちを困惑させています。行政のとりにくみはともすると対症療法になりやすく、特に学校教育ではその基本に、過度の競争主義とエリート育成が貫かれているので、問題はさらに広がっています。そうしたほころびを理由に管理と処罰の強化、さらに『心のノート』、日の丸、君が代による統制の方向に進みつつあります。

この現実には国際的にも批判され、国連子どもの権利

委員会は二月初め二回目の審査結果を公表しました。

前回（一九九八年）に続き過度な競争教育、差別、体罰、いじめ等々困難な状況が指摘され、改善していくよう再度日本政府に勧告がなされました。

そうした中、教師たちは急速な管理体制の強化で、ますます発言しなくなり、またできなくなってきました。子どもたちの意見、要求も遠ざけられています。親たちも現状に首を傾げ、困惑しています。行政は対応能力を失っているどころか逆の方向を進め、いっそう問題を深刻にしています。新潟県においても、とりわけこの数年来その傾向が顕著となつていきます。その先に教育基本法、さらに憲法の改悪が計画されています。このままでは子どもたちが生き生きと元氣になれるはずがありません。

いまこそ教育や学校について多くの関係者で本音を出し合つてみたいのです。子ども自身、親、教師、青年、老人、地域などさまざまな意見がいっぱいあつてよい、多様なほどよい、遠慮のない本音がよい、その中からきつと何かが見えてくるのではないのでしょうか。